

東京・大阪両都市の新聞社による野球(スポーツ)イベントの展開過程 ——1910～1925年を中心に——

西原 茂樹*

新聞経営のあり方が大きく変化した明治末から大正期にかけて、大阪を拠点として多大な経済力を築いた『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』は、「私鉄王国」と称されるほどめざましい発展を遂げつつあった関西私鉄とのタイアップにより、同時期の東京各紙よりもはるかに積極的に野球(スポーツ)イベントを開催していった。両紙のこのような動向には、第5回内国勸業博覧会(1903年)を契機とした関西地域におけるマス・レジャー志向の高まりもまた大きな影響を与えていたと思われる。両紙は当時一般民衆にほとんど知られていなかった野球を幅広く浸透させるべく、一連のイベントを娯楽性に溢れた紙面作りによって報道していった。このことは、野球が日本で受容される過程において娯楽性を喪失し、精神主義的・勝利至上主義的なものに変容したなどといった通説的な歴史像とは異なり、むしろ逆に極めて娯楽色の強い大衆文化として受容され、定着していったという可能性を示唆していると考えられる。

キーワード：野球(スポーツ)イベント、東京・大阪両都市間の差異、大阪の新聞社と私鉄会社のタイアップ、娯楽性、野球の受容と大衆化

はじめに

本研究は、主に1910年から1925年頃までを対象として、当時の東京・大阪両都市に拠点を置いた各新聞社による野球(スポーツ)イベントの展開過程について考察するとともに、そのことによって日本における野球の受容と大衆化に関する従来の定説に対して若干の問題提起を行うことを目的とするものである。

日本におけるマス・メディア、特に新聞社とスポーツとの関係について、欧米ではあまり見られない日本独自の特徴としてこれまで指摘さ

れてきているのが、マス・メディアが単にスポーツを報道するのみにとどまらず、自らスポーツイベントを仕掛け、主催・後援してきたという歴史である。しかも吉見(1996)が指摘するように、欧米でスポーツをはじめとしたイベントを仕掛けるのはどちらかと言えばタブロイド的な、あまり高級とは思われていない新聞に限られていたが、日本では『朝日』『毎日』『読売』といった主要全国紙がすべてメディア・イベントに関わってきたのである。このような事実は、日本におけるスポーツ文化形成のプロセスを歴史的に検討するにあたって、こうしたマス・メディアからの影響を見ていく視点が非常に重要になることを物語っていると言えよう。

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

ところで、戦前期の東京・大阪両都市の主要新聞社による野球（スポーツ）イベントの展開過程を比較してみると、イベントの主催・後援の回数や報道の具体的なありようといった様々な点について、非常に大きな差異が存在していたことに気付かされる。戦前期の日本におけるマス・メディアとスポーツとの関係について検討したこれまでの研究では、本研究の対象となる明治末から大正期にかけて、新聞ジャーナリズムの変質過程を背景として新聞社がスポーツに対して積極的に関与していったことが指摘されている¹⁾が、地域差の存在について指摘したものは皆無である。

したがって本研究は、それらの先行研究に地域差という新たな視点を付け加えるという意義を持つが、それと同時に地域差という視点から、これまで描かれてきた日本における野球の受容と大衆化に関する通説的な歴史像を相対化してその再検討を提起するものである。

日本における野球の受容と大衆化に関する先行研究においては、専ら第一高等学校（一高）、早稲田、慶應などといった、同世代人口の1%にも満たなかった東京のエリート学生たちの実践や思想についての考察が中心となってきた²⁾。そして、東京以外の地域における野球の受容や定着については詳細な検討がほとんどなされないまま、あたかも東京のエリート学生たちの間で育まれた野球に対する思想や実践の形態が、そのままストレートに全国各地に伝播し、一般の民衆にも受け入れられて定着していったかのような歴史像が形成されてきたのである。たとえば以下のような記述がその典型的なものであろう。

「日本野球の先駆者、一高のこのやり方

〔攻撃において積極的に打ちに行かず、四球戦法でひたすら勝ちを狙うような作戦＝引用者註〕は、一つのマニュアルともなっており、全国に流布した。野球熱が他の大学へ、中学へ、小学校へ、路上の子供たちへと流れ下るとき、このやり方もまた、それについて流れ下ったのだ。野球の最後のバリエーション（変種）となった路地裏の『三角ベース』にすら、一球入魂の精神主義は横溢することになる」〔佐山（1998）、121頁〕

このように、日本における野球の受容と大衆化をめぐるのは専ら東京を中心とした単線的な発展という見方に基づいた歴史記述が行なわれてきたのであり、その結果野球は日本においてエリート学生たちを中心として受容される過程において伝統的な“武士道精神”や“武道精神”と出会い、それによって娯楽性を喪失し、精神主義的・勝利至上主義的な信条を濃厚に持った“野球道”へと変貌したなどといった通説的な歴史像がより強固なものとなったのである。

しかし、近年の体育・スポーツ史研究においては、そのような従来の歴史像を相対化していくような成果が積み重ねられつつある。たとえば坂上（2001）は、一高野球部員たちをはじめとする当時の選手たちの言説について検討し、彼らの一見精神主義的な主張が、野球を否定的にみる当時の風潮との緊張関係において発せられていたものであること、また、初期においては野球の持つ娯楽的な側面が彼らの中でも重要な位置を占めていたこと等を明らかにしている。また小野瀬（2001）は、スポーツの本質について争われた昭和初期の「スポーツ論争」に焦点を当て、その論争においてスポーツの娯楽的価値を優先する思想が非常に重要な役割を果

たしたことを明らかにし、日本人のスポーツ観の特徴として従来挙げられてきた「娯楽性の欠如」という見解がいかに一面的なものであるかを指摘している。さらに高津(1994, 1995, 2001)の一連の研究では、日本における近代スポーツの受容過程での精神的土壌が、従来言われてきた「伝統としての武士道ないし武道精神」にではなく、「出遊」や「物見遊山」といった民衆の伝統的余暇活動の様式に求められ、その中で健康な生活や自己規律、「楽しさ」や「愉快」「面白さ」を求めて近代スポーツに接近していった民衆の主體的な受容像が描き出されている。以上三者の研究は本研究とは直接の対象や方法は異なるものの、いずれも「娯楽性」という要素を重要視する点において、本研究と問題意識を共有していると考えられる。

以下の各章においては、東京・大阪両都市間での比較が逐一なされていくことになるが、明治末から大正期にかけての『大阪朝日新聞』(以下、『大朝』)および『大阪毎日新聞』(以下、『大毎』)³⁾は、同時期の東京各紙よりもはるかに積極的に野球(スポーツ)イベントを展

開していくのである。そのことは、両紙の販売エリアである西日本地域、とりわけ大阪をはじめとする関西地域において、従来の歴史像とはまったく異なった仕方野球を受容させ、大衆化を推進させていったと考えられる。少し大げさに言えば、関西という地域に着目することによって、日本における野球の受容史の全体像が大きく塗り替えられてしまう可能性があるであり、本論の内容を先取りして言ってしまうと、関西地域の多くの民衆にとって野球は、精神主義的・勝利至上主義的なものとしてではなく、初めの段階から娯楽色の極めて強い大衆文化として受容されていった可能性が高いのではないかと考えられるのである。

1. 新聞社による野球(スポーツ)イベントの展開

(1) 新聞経営の変質過程

先に述べたように、明治末から大正期にかけて各新聞社は野球をはじめとした各種スポーツに積極的に関与し始めることになるのだが、メ

表1 『大朝』のスポーツ関連企画・イベント(「全国中等学校優勝野球大会」の各地区予選大会は除く)

年 月 日	内 容
1913. 10. 4	豊中で、ワシントン大・早大・明治大チームを招いて、日米大野球を開催(6日まで)。
1915. 8. 18	大朝・東朝、豊中で全国中等学校優勝野球大会(現・全国高等学校野球選手権大会)第1回大会を主催。
1916. 1. 15	鳴尾でアメリカ人ナイルスの宙返り飛行を開催(16日まで)。
1916. 4. 24	鳴尾でアメリカ人A・スミスの宙返り飛行を開催、夜間飛行も行う(26日も)。翌1917. 5. 20、再び招き、高等飛行を実演。
1916. 5. 16	『野球年鑑』を創刊。1919年から『運動年鑑』と改称し1958年まで刊行。
1916. 8. 2	山陰通信部、第1回山陰庭球大会を主催(翌年以降も継続:のち後援に転換)。
1916. 10. 28	鳴尾で第1回全日本東西対抗陸上競技大会を主催(29日まで)。以後、隔年開催で、1932年の第7回までつづいた。
1916. 12. 26	鳴尾運動場で冬期陸上競技練習会を初めて主催(翌年1月7日まで:以後も毎年、夏期・冬期の2回に分けて開催)。
1917. 5. 19	豊中でフィリピン大対早大野球試合を開催。
1917	京都通信局、スキー練習会を伊吹山で開催。
1918. 4. 3	広島販売部、関西学院中等部と広島商・広島中との野球対抗試合を主催。

1918. 4. 20	鳴尾で第2回一般青年陸上競技会、第1回中等学校選抜陸上競技大会を開催（21日まで：翌年以降も継続）。
1918. 10. 17	京都通信局、第1回京津陸上競技大会を主催（翌年も第2回を開催）。
1918. 11. 23	鳴尾での第1回全関東関西対抗野球戦を後援（24日まで）。
1919. 4. 26	二大陸上競技大会として、 <u>鳴尾</u> で中等学校選抜選手権競技と一般青年競技を主催（27日まで）。
1919. 7. 22	金栗四三・秋葉祐之両氏の下関 - 東京間長距離競争を後援（8月10日まで）。
1919. 8. 2	奈良通信部、第1回奈良県野球大会を主催（翌年以降も継続、のち後援）。
1919. 8. 26	神戸通信局、第2回神戸少年野球大会を後援（29日まで）。
1919. 10. 18	杉村倉庫グラウンドでの大阪少年野球大会を後援。
1919. 11. 1	鳴尾での第3回全関東関西対抗野球戦を後援。
1920. 1. 1	伊吹山上で、第1回スキー大会を主催（2日まで：翌年以降も継続）。
1920. 4. 4	門司通信部、第1回筑豊実業野球大会を後援。
1920. 5. 16	鳴尾で第1回全国実業団野球大会を主催（17日まで：翌年以降は後援）。
1920. 5. 23	鳴尾での関西学院対早大対抗陸上競技会を後援（翌年以降も数回実施）。
1920. 5. 27	松山通信部、第1回愛媛近県野球大会（中等学校）を後援（30日まで）。
1920. 6. 13	熊本通信部、第1回熊本実業野球大会を後援（翌年以降も数回実施）。
1920. 7. 12	鳴尾での関西学院対神戸高商対抗陸上競技会を後援。
1920. 9. 23	大津瀬田川での東西両大学対抗競漕を後援（翌年は『大朝』『東朝』合同で、隅田川での第2回大会を後援）。
1920. 11. 23	豊中（大阪ローンテニス倶楽部コート）で、全国硬式庭球大会を主催。日本最初の硬球大会（25日まで）。
1920. 12. 24	伊吹山でスキー練習会（2週間）。
1921. 5. 8	熊本通信部、熊本実業野球大会を後援（翌年以降も継続）。
1921. 6. 26	奈良通信部、第2回奈良県中等学校陸上競技大会を後援（翌年以降も継続）。
1921. 10. 23	豊中での第1回関西専門学校各個優勝戦（テニス）を後援（25日まで：翌年以降も継続）。
1921. 11. 16	鳴尾で清水善造選手歓迎庭球試合を開催。
1922. 4. 1	徳島通信部、第1回徳島近県中等学校野球大会を後援（3日まで：翌年も後援）。
1922. 4. 23 -	関西専門学校庭球対抗戦を後援。
1922. 5. 1 -	京阪神各地のコートでの関西専門学校リーグ戦（テニス）を後援（翌年以降も継続）。
1922. 5. 7	鳴尾で第1回全国府県青年団対抗リレー大会を主催。
1922. 5. 14	名古屋通信部、東海専門学校野球大会を後援（15日及び6月3日も：翌年も後援）。
1922. 5. 28	大阪城南射撃場で射撃会を主催。
1922. 6. 4	広島通信部、第3回広島県女子体育大会を後援（翌年以降も継続）。
1922. 8. 31	呉通信部、第8回広島県実業野球大会を後援（10月8日まで：翌年以降も継続）。
1922. 10. 1	京阪電鉄所有寝屋川グラウンドでの第1回京阪神実業野球大会を後援（17日まで：翌年以降も継続）。
1922. 10. 17	岡山通信部、第1回岡山県女子陸上競技会を主催（翌年以降も継続）。
1922. 10. 29	尾道通信部、第2回中国四国実業野球大会を後援（20日まで：翌年以降も継続）。
同	鳴尾での関東関西対抗庭球戦を後援（31日まで：『大毎』と合同）。
1922. 11. 5	松山通信部、中等学校陸上競技を後援。
1923. 3	編集局に運動部を新設。
1923. 3. 15	『アサヒスポーツ』を創刊（『大朝』『東朝』合同での発行だが、出版地は大阪）。
1923. 4. 7	松山通信部、第3回松山地方実業野球大会を後援。
1923. 4. 29	神戸支局、兵庫県高女連合陸上競技を後援（翌年以降も継続）。
1923. 6. 2	名古屋通信部、東海女学生キツンボール（女子向けの野球）大会を後援（11月11日にも再び挙行：翌年以降も継続）。
1923. 7. 1	津通信部、第1回三重県実業野球大会を後援（8日および15日も）。

1923. 10. 28	松山通信部, 第1回愛媛近県中等学校陸上競技会を後援(翌年も第2回大会を後援)。
1923. 11. 23	京都通信局, 第1回滋賀県中等学校陸上競技を後援(翌年も継続)。
1924. 1. 4	全日本蹴球大会近畿地方予選(サッカー)を後援(6月13日まで)。
1924. 1. 10	第三高等学校での第1回ラグビー東大対京大定期戦を後援。
1924. 1. 18	阪急電鉄所有宝塚運動場での第1回関西専門学校ア式蹴球リーグ戦(サッカー)を後援(20日まで)。
1924. 4. 20	岐阜通信部, 第4回東海実業団野球大会を主催(6月8日まで: 翌年以降は後援)。
1924. 5. 24	富山通信部, 第1回北陸実業野球大会を主催(25日まで: 翌年以降も継続)。
1924. 5. 31	大阪市立運動場での第1回法大対関大対抗陸上競技を後援。
1924. 7. 17	第1回全九州高等学校水泳大会を後援。
1924. 7. 25	岐阜通信部, 全国中等学校ア式蹴球大会を後援。
1924. 7. 29	京大での第1回全国高等専門学校野球大会を後援(30日まで。『東朝』との合同による: 翌年以降も継続)。
1924. 8. 3	大津瀬田川での, 第22回全国中等学校競漕大会を後援(翌年以降も継続)。
1924. 8. 4	大津瀬田川での, 関西高等専門学校競漕大会・高等学校対抗競漕を後援。
1924. 8. 24	神戸通信局, 全但実業野球大会を後援(26日まで)。
1924. 8. 27	名古屋支局, 東海中等学校陸上競技大会を後援(28日まで)。
1924. 9. 13	和歌山通信部, 第1回和歌山県青年相撲大会を後援。
1924. 9. 25	京都通信局, 第6回琵琶湖一週駅伝を後援(27日まで)。
1924. 9. 28	岡山通信部, 岡山県下中等学校陸上競技大会を後援。
1924. 10. 4	名古屋支局, 全国中等学校ア式蹴球大会を後援(5日まで)。
1924. 10. 5	富山通信部, 第1回北陸女子庭球選手権大会を主催(6日まで: 翌年以降も継続)。
1924. 10. 16	鳥取通信部, 第3回山陰学童陸上競技会を後援(17日まで)。
1924. 10. 19	佐賀通信局, 第1回九州中等学校陸上競技大会を後援。
1924. 10. 25	松山通信部, 第3回愛媛県陸上競技選手権大会を後援(26日まで)。
1924. 10. 31	岐阜通信部, 中部日本中等学校庭球大会を後援。
1924. 10	全国各地で, 世界四大陸上競技選手模範競技会を主催(11月まで: 『東朝』と合同)。
1924. 11. 9	京都通信局, 第2回滋賀近県実業団庭球大会を後援。
1924. 11. 10	松山通信部, 第1回愛媛県女子選手権陸上競技大会を後援。
1924. 11. 24	阪急宝塚運動場での, 第2回関西専門学校ア式蹴球リーグ戦を後援(26日まで)。
1924. 11. 26	広島通信部, 広島県女子排籃球(バレーボール・バスケットボール)大会を後援。
1925. 1. 24	和歌山通信部, 第2回和歌山県中等学校相撲大会を後援。
1925. 2. 8	奈良通信部, 奈良県女子中等学校卓球大会を後援。
1925. 2. 17	京都・神戸両支局, 第1回夜久野スキー大会を後援。
1925. 2. 20	大阪市立運動場での, 第2回関西籠球選手権大会を後援。
1925. 4. 7	甲子園での, パドック・マーチソン両選手の模範競技(陸上)を後援(『大毎』と合同)。
1925. 4. 19	名古屋通信局, 第2回中部日本卓球大会を後援。
1925. 5. 16	鳴尾および甲子園での, ダイヤモンド倶楽部のコーチを受けた近畿各地の中学野球チームの連盟戦を後援(7月5日まで)。
1925. 5. 17	松山通信部, 第1回関西女子庭球大会を後援。
1925. 5. 24	大津瀬田川での, 明大対同大競漕を後援。
1925. 6. 28	岡山通信部, 岡山県男子排球大会を主催。
1925. 7. 18	京阪寝屋川での, 第1回近畿選抜中等学校野球試合を後援(19日まで。10. 17 - 18にも開催)。
1925. 7. 30	門司支局, 全九州卓球大会を後援。
1925. 8. 8	津通信部, 第2回津市実業野球大会を後援(19日にも)。
1925. 8. 26	福井通信部, 第4回福井県中等学校野球大会を後援(28日まで)。
1925. 9. 23	金沢通信部, 第1回北陸中等学校庭球大会を後援(27日にも)。

1925. 10. 3	熊本通信部，全九州卓球大会を後援（4日まで）。
1925. 10. 4	岡山通信部，岡山県女子排籠球大会を主催。
1925. 10. 11	松山通信部，愛媛近県実業団庭球大会を後援。
1925. 10. 17	岐阜通信部，岐阜近県中等学校野球大会を後援（19日まで）。
1925. 11. 22	山口通信部，山口県中等学校野球大会を後援（24日まで）。

表2 『大毎』のスポーツ関連企画・イベント

年 月 日	内 容
1901. 12. 15	堺大浜で，50マイル徒歩競争主催。
1905. 8. 20	大阪築港 - 御影魚崎間で，海上10マイルの長距離競泳主催。
1906. 6. 15	浜寺と阪神打出海岸に，海水浴場を開設，海泳練習所の新設を社告。7月1日から8月31日まで開場。以後毎年開場。（1922年，浜寺水練場を水練学校と改称）
1908. 7. 26	浜寺海水浴場で，関西中等学校連合庭球大会を開催。毎日主催の選手権大会中もっとも古いもの。（以後，毎年開催。のちに全国大会に発展）
1909. 3. 21	大阪 - 神戸間でマラソン大会。マラソンという語をはじめて使用。23日に大会の活動写真を松島の第二電気館で封切。
1909. 7. 25	浜寺海水浴場で，学生相撲大会を開催。以後，毎年開催。
1909	内外人のヨット競漕を開催（翌年も）。
1910. 10. 25	香爐園で，シカゴ大・早大チームを招いて，日米野球大試合を開催（27日まで）。
1911. 6	元早大野球選手西尾守一をスポーツ専門記者として招聘。
1912. 4. 28	大阪 - 箕面間で，山野横断競争（クロスカンツリーレース）を主催。
1913. 1. 1	年間企画として，日本環海海流調査，東洋オリンピックに選手派遣，空中飛行練習生を発表。
1913. 6. 21	豊中で慶應対スタンフォード大の「日米大野球戦」を主催（22日まで）。
1913. 10. 17	阪急とタイアップして，豊中運動場で「日本オリンピック大会」（第1回）を開催（19日まで：翌年以降も継続）。
1913	浜寺海水浴場に婦人水浴場を設置。
1915. 5	第2回極東選手権競技大会（上海）に運動部記者西尾守一を派遣（わが国の新聞社が運動記事のために海外に社員を派遣した最初）。
1915. 7	大阪市運動プールで，第1回全国中等学校競泳大会を主催（翌年以降も継続）。
1915. 8. 22	堺大浜 - 大津間で，第2回海上10マイル競泳を主催。
1916. 8. 20	浜寺で，極東選手権競技大会水泳競技の関西予選大会を主催。
1916. 11. 4	豊中で，慶應対ハワイ・セントルイス野球戦を開催（6日まで）。
1916. 12. 24	豊中で，京都・大阪・神戸三都対抗陸上競技大会を主催。
1917. 5. 20	豊中で日・比オリンピック大会を開催。
1917. 8. 5	浜寺公園で，近畿実業団庭球大会を主催。
1917. 8. 9	慶応大学の野球選手を和歌山・山陽・山陰・九州各地方へコーチとして派遣（23日まで）。
1918. 1. 12	豊中で，第1回全国中等学校フットボール大会。サッカーとラグビーをあわせて行う（13日まで）。現在の全国高等学校サッカー選手権大会および全国高等学校ラグビー選手権大会。
1918. 5. 25	京都支局，京都専門学校相撲大会を主催（翌年以降「京都学生相撲大会」として数回継続）。
1918. 8. 4	浜寺で，第2回京阪神実業団庭球大会を主催（翌年以降も継続）。
1918	陸上競技の方面で日本賞・極東賞・世界賞を設けてレコード賞を贈り，記録の進歩を促進。
1919. 4	木下東作，運動関係に参与（客員）。
1919. 9. 18	豊中運動場で，全国専門学校野球大会，第1回関西大会を主催（21日まで）。
1919. 10. 24	鳴尾での満州倶楽部対全関西野球団の野球試合を後援。
1919. 11. 1	第1回全国学生相撲選手権大会，第1回全国中等学校相撲選手権大会を主催。関西日報から継承（当時は相撲大会と称した：現在も継続）。

1920. 5	大毎野球団を結成。初の実業団チーム(1929年10月解散)。
1920. 7. 18	神戸支局、須磨遊園地で第2回兵庫県下オールド・ボーイズ庭球大会を主催。
1920. 10. 4	京都支局、滋賀県下中等学校相撲大会を主催。
1921. 10. 16	豊中の大阪ローンテニス倶楽部コートで第1回全日本庭球選手権大会。以後、毎日庭球選手権大会(東日庭球トーナメント)を春季大会と称して東京で、全日本庭球選手権大会を秋季大会と称して大阪で開く。
1921. 11. 15	豊中で、清水善造選手歓迎庭球試合を主催。
1922. 7. 22	阪急宝塚運動場での全国専門学校野球大会を後援(24日まで)。
1922. 8. 5	浜寺で、京阪神実業庭球大会(軟式)を主催(6日まで)。
1922. 8. 14	浜寺海上で、全国競泳大会を主催。
1922. 10. 29	鳴尾での関東関西対抗庭球戦を後援(31日まで:『大朝』と合同)。
1922	浜寺海水浴場にテント村を創設、一般にキャンプ生活の趣味を鼓吹する。また水練所の組織を改善し、浜寺水練学校とする。
1922	運動課を新設。木下東作、初代課長となる。
1923. 5. 5	岡山通信部、岡山少年野球大会を主催(8日まで)。
1923. 6. 3	堂島川での第2回関西漕艇大会を後援。
1923. 6. 9	岡山通信部、第6回岡山県下中等学校庭球大会を後援(10日まで:翌年以降は主催)。
1923. 8. 16	浜寺で、大阪府下小学生競泳大会を主催。
1923. 10	日本の新聞として初めてワールド・シリーズをスポーツ記事として取り上げる。
1923. 10. 28	和歌山通信部、第4回和歌山県中等学校庭球大会を後援(のち主催)。
1923. 12. 2	大手前女学校で、第1回女子中等学校学校対抗バレーボール大会を主催(翌年以降も継続)。
1923. 12. 9	市岡高等女学校で、女子軟式野球大会を主催。
1924. 4. 1	名古屋市八事の山本球場で、第1回全国選抜中等学校野球大会(現・選抜高等学校野球大会)を開催(5日まで。第2回から甲子園で開催)。
1924. 6. 15	日本女子オリンピック大会第1回(16日まで)。大阪市立運動場で開催、のち大和美吉野で昭和7年まで9回行う。
1924. 7. 20	広島通信部、第5回広島近県実業庭球大会を主催。
1924. 7. 27	高松通信部、第3回四国中等学校庭球大会を主催。
1924. 8. 2	浜寺で、全国実業準硬球トーナメント(テニス)を主催(3日まで)。
1924. 8. 9	第1回全国女子中等学校庭球選手権大会(10日まで)(1948年から高等学校と改称。1962年まで毎日新聞社が共催した)。
1924. 8. 10	名古屋支局、第1回全国軟式庭球大会を主催(翌年以降も継続)。
1924. 8. 17	名古屋・岐阜両通信部、第1回中部日本庭球大会を主催。
1924. 8. 31	第2回関西専門学校水上競技会を主催(9月1日まで)。
1924. 10. 11	奈良県中等学校庭球大会を主催(12日まで)。
1924. 12. 7	夕陽丘高等女学校での女子中等学校籠球大会を主催。
1925. 2. 27	1万5000号と大阪市の新市制施行を記念して、 ^{だい} 大阪記念博覧会、大阪文化史大講演会、露西亜経済報告書・労農露国研究叢書の発行、秘籍大観・珍著大観の刊行、大毎野球団の初渡米、全国選抜中等野球大会、米国三大庭球選手招待、全国鉄道地図贈呈の8つの事業を行うことを発表。
1925. 3. 21	アメリカ庭球選手キンゼー兄弟とスナッドグラスを招待、全国各地で模範試合を開催(20日まで)。
1925. 4. 7	甲子園での、パドック・マーチソン両選手の模範競技(陸上)を後援(『大朝』と合同)。
1925. 4. 19	天王寺公園で、 ^{だい} 大阪記念学童野球大会を主催(20日まで)。
1925. 5. 17	甲子園での、母校後援倶楽部野球リーグ戦を後援(20日まで。11.8-12.6にかけても開催)。
1925. 6. 7	明石師範学校での、第11回兵庫県女子排球大会を主催。

1925. 6. 13	龍山鉄道グラウンドで、全鮮選抜野球大会を主催（14日まで）。
1925. 8. 22	名古屋支局、第2回愛知県実業団夜間庭球大会を主催。
1925. 11. 14	第8回日本オリンピック大会内で、日本女子準硬式庭球大会を主催（15日まで）。
1925. 12	第1回全国高等専門学校ラグビー大会を主催。

ディア史的に見ると、この時期は産業化の進行による都市への人口集中、社会全体の流動化などによる情報需要の高まりといった受け手側の条件を背景として、新聞界全体で企業化が急速に進行した時期であった。つまり、政治に関心の強い特定の知識階層をターゲットとして、社説や論説等の言論に重きを置いた政論新聞（『大新聞』）や、勸善懲惡談を売り物としたすべてふり仮名つきの平俗な内容で、政治に無関心な知識層・文学愛好者・婦人等をターゲットにした『小新聞』が衰退し、時事的報道や評論を中心に据え、新聞小説などの娯楽の提供にも取り組んだ報道新聞（『中新聞』）への移行が進んでいったのである。特定階層の読者を想定した前二者とは異なり、後者はより幅広い社会階層をターゲットとし、販売店網の形成や、広告主の潜在需要を掘り起こしていく営業活動・広告企画といった部数増大を実現するシステムを形成していった。それと同時に、自社の企画した様々なイベントを大々的報道によって大事件化し、販売拡張に結びつけていく経営方法がとられるようになっていく。このように、それまで以上に組織的計画的営業活動によって持続的拡大を実現していく「企業の新聞」の形成が、この時期以降進行していったのである⁴⁾。

（2）『大朝』『大毎』両紙による野球（スポーツ）イベントの積極的展開

このような新聞経営の方法そのものの大きな転換期にあって、『大朝』『大毎』両紙は互いに競争しあうように野球をはじめとしたスポーツ

のイベント化に取り組んでいく。表1および表2は、1900年代から1925年までにかけての、両紙によるスポーツ関連企画やイベントの開催をまとめたものである⁵⁾。

このうち野球に関わるものからまず見ていくと、『大朝』は1913（大正2）年10月の「日米大野球戦」をはじめとして「全国中等学校優勝野球大会」（現・全国高等学校野球選手権大会）、フィリピン対早大の試合、全国実業団野球大会といったイベントを主催し、「全関東関西対抗野球戦」や「全国高等専門学校野球大会」などといった中等学校、実業団等の計6つの野球大会で後援を行い、また『野球年鑑』の刊行（のち『運動年鑑』に改題）にも取り組んでいる。

一方『大毎』も、1910（明治43）年10月の「日米大野球試合」を皮切りに、慶大とスタンフォード大を招いての「日米大野球戦」、慶大対ハワイ・セントルイス野球戦と相次いで日米のチームによる国際試合を挙行し、その後も全国専門学校野球大会・第1回関西大会を主催、また1920年5月には早慶などから選手たちを入社させることで自社独自の実業団野球チームである「大毎野球団」を旗揚げして大学や他の実業団との試合を行い、さらに「全国選抜中等学校野球大会」（現・選抜高等学校野球大会）を創設するなど多くのイベントを自ら主催し、その他後援イベントも多岐にわたっている。

野球以外のスポーツ全般を見渡しても、両紙ともあらゆるスポーツ種目に手を伸ばしているが、とりわけ「全国大会（全日本）」「日本」と

冠されたものも含む)」と銘打たれたイベントを、『大朝』が「全日本東西対抗陸上競技大会」など3つ、『大毎』が「全国中等学校競泳大会」をはじめとして11も開催するなど、熱心に取り組んでいることがわかる。特に『大毎』が創設した「全国大会」の幾つかは現在も継続して行われており、1918年1月に第1回大会が行われた「全国中等学校フットボール大会」は後年それぞれ「全国高等学校サッカー選手権大会」および「全国高等学校ラグビー選手権大会」として発展(サッカーは1967年に日本サッカー協会の主催イベントとなり、1976年には会場も首都圏に移転した)、1919年11月に創設された「全国学生相撲選手権大会」は、現在もその年の学生横綱を決定する場となっている。

そしてイベントの開催場所を見ると、既に初期の段階から豊中(阪急電鉄所有)、鳴尾・甲子園(以上、阪神電鉄所有)、浜寺(南海電鉄所有)といった私鉄会社所有の施設(表1・2中の下線部分)で実施されているケースが両紙合わせて46にも上り、こうした各種のイベント開催が私鉄会社とのタイアップによって可能とな

ったことを物語っている。この他、両紙ともに本社だけでなく地方支局・通信部レベルでも数多くのスポーツ大会の主催・後援が行われ、各地での販売戦略を展開するうえでもスポーツが重要な役割を果たしていたことが窺えよう⁶⁾。

こうした『大朝』『大毎』による野球(スポーツ)イベントの積極的な展開と比較して、同時期の東京各紙の取り組みは決して盛んとはいえないものであった。

(3) 東京各紙のスポーツイベント展開の特質

表3～7は、当時の東京の有力紙であった『東京朝日新聞』(以下、『東朝』と表記)『東京日日新聞』(同、『東日』)『報知新聞』(同、『報知』)『時事新報』(同、『時事』)『読売新聞』(同、『読売』)各紙による、主に1910年代から1925年にかけてのスポーツ関連企画やイベントの開催をまとめたものである。

まず『大朝』『大毎』の系列紙である『東朝』『東日』についてだが、明らかなことは、スポーツイベントの主催や後援が両紙とも『大朝』『大毎』に比べるとかなり少ないということ

表3 『東朝』のスポーツ関連企画・イベント(「全国中等学校優勝野球大会」の各地区予選大会は除く)

年 月 日	内 容
1911. 8. 20	「野球の諸問題」で野球批判のキャンペーンを開始。29日から9月19日まで「野球と其害毒」を連載。
1915. 8. 18	大朝・東朝、全国中等学校優勝野球大会(現・全国高等学校野球選手権大会)第1回大会を主催。
1918. 2. 9	東京高等師範学校運動場での第1回関東蹴球大会(サッカー)を後援(翌年以降も継続)。
1918. 8. 31	静岡通信部、静岡県野球大会を主催(9月2日まで)。
1919. 3. 22	早大運動場での第2回全関東関西対抗野球戦を後援。
1921. 6. 15	極東選手権競技大会選手歓迎活動写真大会を神田青年会館で後援・開催。ついで市内4カ所、地方数カ所で巡回映写を実施。6月25日には「極東競技大会実況」(朝日新聞社撮影)を浅草大勝館、新声館、豊玉館、浅草日本館で封切。
1921. 11. 6	清水善造の「世界庭球選手権争覇参戦談」の講演会を社で開催。
1922. 2. 18	樺太・東京間を犬スキーで走破し新記録を作った桜庭留三郎のため、講演会を社で開催。
1922. 4. 29	芝浦で第1回京浜中等学校野球リーグ戦を主催(5月20日まで:この年限り)。
1922. 11. 12	陸軍戸山学校での日本女子選手権陸上競技会を後援。妃宮が台覧。

同	二高での極東選手権競技大会陸上競技仙台予選を後援。
1923. 1. 13	東京スキー倶楽部主催の第1回関東スキー大会を後援。
1923. 3	運動課を新設。
1923. 5. 22	日比谷公園および芝公園（27, 28日）で、極東選手権競技大会の東京朝日新聞特撮活動写真と速報とを公開。観衆1万人以上。
1924. 1. 26	皇太子ご成婚奉祝のため『東京朝日』の飛行機4台、『アサヒスポーツ』などの購買券3600枚を投下。
1924. 3. 1	青山師範学校での第1回関東小学校ア式蹴球大会（サッカー）を後援（翌年以降も継続）。
1924. 9. 28	東京高等師範学校道場での第5回全国中等学校剣道大会を後援。
1924. 10. 25	東京帝大トラックでの第2回全国女子選手権陸上競技大会を後援（26日まで：『大朝』と合同）。
1924. 10. 26	第1回茨城近県中等学校陸上競技大会を後援。
1925. 1. 31	全国中等学校スキー選手権大会を後援（2月1日まで）。
1925. 5. 2	千葉通信部、第2回関東中等学校庭球大会（軟式）を後援（3日まで）。
1925. 5. 16	極東選手権競技大会開始につき、東京市内12カ所に速報台を設置し、記録を速やかに掲示。
1925. 5. 30	本郷中学での第2回全日本女子排籠球競技大会を後援（31日まで）。
1925. 8. 23	土浦通信部、大杉神社での関東軟式庭球大会を後援。

表4 『東日』のスポーツ関連企画・イベント

年 月 日	内 容
1919. 8	東京一ツ橋コートで第1回毎日庭球選手権大会（東日庭球トーナメント：翌年以降も継続）。
1919. 8. 30	東京高等商業学校コートでオールド・ボーイズ庭球大会を主催（翌年以降も継続）。
1924. 11. 6	明治神宮競技場で全日本選手権陸上競技大会を主催（8日まで：『大毎』と合同）。
1925. 5. 23	明治神宮競技場で第1回女子体育運動会を主催（24日まで）。
1925. 6. 6	立大で東京中等学校硬球リーグ戦（テニス）を主催（7日及び13日も）。
1925. 7. 20	宇都宮支局、栃木県中等学校野球大会を主催（22日まで）。
1925. 8. 12	秋田中学で第1回東北陸上競技会を主催。
1925. 9. 13	茨城県下女子中等学校庭球リーグ戦（軟式）を主催。

表5 『報知』のスポーツ関連企画・イベント

年 月 日	内 容
1908. 8. 16.	千住大橋 - 新大橋間5マイル競泳を主催。
同	水泳の活動写真を浅草電気館で上映。
1911. 7. 24	羽田運動場で、中等学校連合野球大会を開催。参加校は麻布中学・青山学院・早稲田中学・荏原中学・成城中学・立教中学・横浜商業・正則中学の8校で、押川清・飛田穂州が審判を務める（28, 30日にも開催）。
1913	東西合併角力大懸賞を催し、東京方の横綱を倒した大阪力士には金杯一個、大関を倒した大阪力士には銀杯一個、東西幕内全部を通じ最優勝力士に銘刀一口を授与。
1917. 10. 21	東京 - 横浜間25マイル・マラソンを主催。翌日、実況映画公開。
1918. 10. 28	第1回報知マラソン主催。横浜公園 - 東京上野公園間（翌年以降も継続）。
1920. 2. 14	第1回東都大学専門学校東京 - 箱根間往復130マイル駅伝競走を主催（15日まで：翌年以降も継続）。現在の箱根駅伝。
1920. 3. 21	第1回中等学校東京 - 横浜間往復45マイル駅伝競走を開催（翌年以降も継続）。
1920. 6	駒場トラックで東都小学生対抗競技を主催（翌年以降も継続）。
1921. 12. 28	東京帝大運動場で陸上競技冬期試練を主催。
1923. 8. 29	芝浦で全国少年競泳大会を主催（翌年以降も継続）。

表6 『時事』のスポーツ関連企画・イベント

年 月 日	内 容
1901. 11. 9	上野不忍池畔で、12時間マラソンを主催。
1909	夏場所から大相撲優勝制度が制定され、この時から時事新報が優勝力士の写真掲額を行う。
1911. 8. 18	芝浦で、速力検定水泳大会を開催。
1913. 7. 25	第1回富士登山競争を主催。
1917. 7. 22	第2回富士登山競争を主催。
1921. 8. 17	浅間登山競争を主催。
1922. 5. 28	学習院コートで、東京女学生庭球大会(軟式)を主催(10月21、22日にも開催)。
1923. 8. 2	富士横断競争を主催。
1924. 5. 17	東京高等師範学校で第4回関東女学生庭球大会を主催(18日まで;翌年以降も継続)。
1924. 6. 29	第1回埼玉県女学校庭球大会を主催(翌年以降も継続)。
1924. 10. 26	第7回静岡県中等学校庭球大会を主催。
1924. 11. 8	女学生庭球大会を主催(9日まで)。
1925. 4. 11	田園都市球場で、関東選抜中等学校野球大会を主催(12日まで)。参加4校。
1925. 4. 18	京華中学で、関東・関西対抗軟球試合(テニス)を主催(19日まで)。
1925. 5. 24	第4回静岡県女学生庭球大会を主催。
1925. 6. 21	日比谷公園で、女子実業団庭球大会を主催。
1925. 8. 23	王子プールで東京実業団水泳大会を主催(24日まで)。

表7 『読売』のスポーツ関連企画・イベント

年 月 日	内 容
1902. 8. 1	「学生富士登山」を企画実施。以後数年実施。
1907. 10. 10	スポーツ欄「運動界」を新設。
1911. 9. 16	神田・青年会館で、野球問題大演説会を主催。
1914. 3. 31	運動欄・学生欄の主任として早稲田大学出身の弥次將軍、吉岡信敬を招く。
1915. 3. 13	野球(早慶明一高戦)勝敗予想投票募集。
1917. 4. 27	京都・東京間で「東海道五十三次駅伝競走」を主催。駅伝の名称を初めて使用。(30日まで)
1920. 5. 14	大相撲勝負の速報所を市内13カ所に特設。
1924. 3. 21	第10回関東実業野球大会を後援(6月22日まで)。
1925. 10. 25	飛田穂州、運動部顧問に。

あろう。野球について見ていくと、『東朝』は1911(明治44)年にいわゆる「野球害毒キャンペーン」を展開して野球に批判的な立場をとった⁷⁾が、その後は主張をトーンダウンさせ、『大朝』が創設した「全国中等学校優勝野球大会」の共催者として東日本各地での予選大会の主催・後援を行っていった。それ以外にも第2回全関東関西対抗野球戦の後援や京浜中等学校野球リーグ戦の主催を行うなどの事例が見られるものの、多くの観客を集めるような大規模な

野球イベントの開催に自ら積極的に関わることはまったくなく、この点において『大朝』とは著しい対照を成している。スポーツ分野全般を見渡しても、1920年代以降テニスなどの選手の講演会や極東選手権競技大会の速報台の設置、活動写真の公開といったイベントを行っている点は特徴的だが、各種競技の大会への関与はどれも後援にとどまっており、自ら主催したケースは見当たらない。『東日』もまた、大きなイベントとしては「東日庭球トーナメント」、お

および『大毎』と合同で開催した「全日本選手権陸上競技大会」が目立つくらいで、『大毎』が創設した「全国選抜中等学校野球大会」にも、当初は共催者として関わることをしていない⁸⁾。

その他の3紙においても、スポーツイベントに取り組む姿勢は『東朝』『東日』と比べて基本的にそれほど大差はないと言えよう。『大朝』『大毎』と比較して実施競技のバリエーションに乏しく（『東朝』『東日』も含め、球技ではテニスが圧倒的に多い）、野球についても、大規模な野球イベントを催す新聞はなく、後年プロ野球の立ち上げに深く関与することになる『読売』でさえ、この時期は野球どころかスポーツイベントそのものをほとんど実施していない。ただ、この3紙に特徴的なこととして、マラソンや駅伝といった陸上競技系種目の開催が多いことが挙げられよう。

そして、大阪紙と比較した時に目につくもうひとつの差異は、東京各紙が私鉄会社とのタイアップによってイベントを開催することが多かったといていいほどなかったことである。

関東の私鉄会社によるスポーツ施設の整備は、京浜電車会社（現・京浜急行電鉄）が1909年に設けた羽田運動場が最初であり、『報知』がここで1911年に「中等学校連合野球大会」を開催している。しかしこのグラウンド整備の発起人が会社内の野球関係者であったことから、明確な企業的意図を伴ってグラウンド建設に着手したのかどうか不明な点が多く⁹⁾、本格的なタイアップであったとは言いがたいように、グラウンドそのものもほとんど姿を消している。

関東私鉄によるスポーツ施設の整備が本格化したのは1920年代後半以降であり、京成電気軌道（現・京成電鉄）が1925（大正14）年秋に開

設した「谷津海岸遊園」（谷津遊園）内の野球場や、京王電気軌道（現・京王電鉄）が1927年6月に開園させた「京王閣遊園地」の敷地内に設けられた大運動場他の施設、そして小田原急行鉄道（現・小田急電鉄）が昭和初期に江ノ島線沿いに設けた各種スポーツ施設¹⁰⁾など、次々と整備されていったが、いずれも小規模なもので、新聞社主催による大きなイベントが行われていたという形跡はほぼ皆無と言ってよい。『報知』『時事』『読売』といった各新聞社がマラソンや駅伝といった種目を多くイベント化しているのも、球技系のイベントを開催できるほどの規模を持った私鉄会社系のグラウンドが関西に比べて格段に少なかったことが一因としてあるのではないだろうか¹¹⁾。

2. 大阪における新聞社と私鉄会社のタイアップ現象の背景

このように、この時期の東京紙と大阪紙の野球（スポーツ）イベントの展開過程にあっては、大阪において新聞社と私鉄会社とのタイアップが実現していたのに対して、東京ではそれがほとんど見られなかったことが顕著な特徴のひとつとして指摘できるのだが、なぜこのような差異が生じたのだろうか。その背景としては、20世紀初頭から1920年代にかけての新聞の企業化プロセスや私鉄会社の発展過程の両都市における違いということが考えられる。

（1）新聞の企業化プロセスにおける東京紙と大阪紙の差異

1-（1）において、1900年前後から1910年代にかけて新聞界全体で企業化が急速に進行したことについて述べたが、この一連のプロセスに

において、東京と大阪とはかなり大きな違いが存在していた。

有山(1995b)によれば、明治以来の一般的な傾向として、政都東京では、新聞はその掲げる政論によって個性化され、市場は分節化されていた。新聞の営業面は蔑視されがちで、極端な場合には非営利主義さえ唱えられた。結果として東京市場においては多数の新聞の割拠状態が続き、飛びぬけた部数を誇る新聞社が生まれない状態が続くことになった。それに対して商都大阪では新聞も他の商業活動と等しく営利事業であることが当然視され、新聞が「商品」であることさえ公言された。そして東京とは違って、1890(明治23)年前後には『大朝』『大毎』両紙が他紙に対して圧倒的優位に立って早くも寡占体制を固めたばかりでなく、東京紙全体の年間部数がようやく500万部を超えた1892年には、両紙を合わせた年間部数は既に2000万部前後に達していた¹²⁾。さらに1900年前後においては、既に地元関西地域のみならず中国・四国・九州地域へ進出し、また東海・北陸地域にもその地歩を固めつつあった。特に京都、奈良、和歌山などでは地元有力紙を圧倒せんばかりの勢いを見せていた¹³⁾。この時期の『大朝』『大毎』両紙は、万人向きのニュースと娯楽の提供に主力を置く紙面編集、即ち一般的読者にとって抵抗の少ない新聞「商品」の生産につとめ、また広告獲得・販売拡大など活発な営業活動によって企業の発展を遂げていったのである。

こうした諸事情を踏まえて考えるならば、『大朝』『大毎』両紙が大規模な野球(スポーツ)イベントをこの時期に次々と実施していくことができた背景には、新聞経営の転換期にあっていち早く「企業の新聞」へと脱皮したことによって築かれた多大な経済力があったことは

間違いないであろう。さらに新聞というメディアが「商品」として認識された大阪の土壤にあっては、野球(スポーツ)という未知の文化に対して商品価値を見出し、紙面作りに活かすことに対して、東京と比べて抵抗感は薄く、はるかに積極的になりえたと言えるのではないだろうか¹⁴⁾。

(2) 関西地域における「私鉄王国」の形成とマス・レジャー志向の高まり

次に『大朝』『大毎』によるイベント開催を、グラウンド等の施設を整備し、多数の観客を輸送する役割を担うことで支えた関西地域の私鉄会社の発展過程について、関東地域と比較しつつ考えてみたい¹⁵⁾。

関西地域では、1910(明治43)年前後の10年間にかけて現在の阪神電鉄、南海電鉄、京阪電鉄、近畿日本鉄道といった私鉄会社が次々と開業していったのだが、こうした私鉄網の発展を支えたのは、この時期の大阪市の目覚ましい経済成長に伴う急速な人口増加であった。1897年の市域拡張当時約76万人だった大阪市の人口は、1902年に約95万人、1907年に約117万人、1912年に約133万人、そして1916(大正5)年には約151万人と急増している¹⁶⁾。こうした大阪市への激しい人口集中が交通革命を促した結果、関西地域では全国に先駆けて、後の時代に「私鉄王国」と呼ばれることになる私鉄網が着々と形成されていったのである。

これらの私鉄会社は自らの沿線に次々とグラウンドや海水浴場などのスポーツ施設を設置していくことになるわけであるが、こうした施策の展開には、同時期の関西地域におけるマス・レジャーへの欲求の高まりが大きく関係していたことは間違いがない。

竹村（1996）によれば、大阪圏では1903年に開催された第5回内国勸業博覧会¹⁷⁾を契機として、機械文明が提供する新しい娯楽システムの大衆化が促され、それによって民衆の余暇活動に対する従来の価値観や様式が大きく変化し、同時に農村共同体の価値観、習慣、娯楽の様式を崩壊させていく契機ともなった。そしてそうした世相に対応する形で、1912年7月には内国勸業博の跡地に大歓楽街である「新世界」が誕生し、敷地内にはパリのエッフェル塔を模した「通天閣」と、ニューヨークのコニー・アイランドをモデルとした遊園地ルナ・パークが開業したが、これらは当初からマス・レジャーという概念によって作られた本格的な遊園地であった。関西私鉄によるスポーツ施設整備の背景にはこのような関西地域におけるマス・レジャー志向の高まりがあったのだが、そうした施設を有効に活用していくためには、当時の日本において最大の経済力を誇った『大朝』『大毎』両紙の社会的影響力を最大限に利用することが必要不可欠であった。そしてそのことは、営業面をより重視した『大朝』『大毎』両紙の経営戦略とも合致していたはずであり、こうした両者の思惑の一致こそが、大正期の大阪において新聞社と私鉄会社のタイアップによって次々と大規模なイベントを開催することを可能にしたと言っているのではないだろうか。

かたや当時の関東地域においては、このように新聞社と私鉄会社とのタイアップが実現する条件は、ほとんど整ってはいなかった。原（1998）によれば、当時の関東地域の鉄道の発展は大阪と違って国鉄中心主義的であり、明治後期までに現在のＪＲの主要路線である東海道本線、横須賀線、東北本線、常磐線、中央線、山手線、総武本線などが開通し、現在とほぼ同

じ規模にまで国鉄が発達していたのに対して、現在につながる各私鉄会社が本格的に発達するのは昭和初期以降のことであった。さらに、戦前期においては専用線路を持つどの私鉄も、鉄道省や市内の交通機関の公営方針を貫く東京市の交通政策に阻まれ、山手線の内部に本格的に入ることは出来なかった。原の言葉を借りて言えば、「民」優位の鉄道網が明治末期以来一貫して維持された関西地域とは対照的に、明治後期以来の「官」優位の鉄道網が昭和初期以降になっても維持され続け、その結果として「民」が「官」に従属したような鉄道文化が育まれたのが当時の関東地域だったのであり、関東私鉄によるスポーツ施設の整備は、前述したとおり極めて低調なものにとどまらざるを得なかった。このような関東私鉄と、『大朝』『大毎』両紙に比べて企業の発展がはるかに遅れた当時の東京各紙との間には、大阪におけるようなタイアップは起こるべくもなかったのである。

3. 『大朝』『大毎』両紙による野球イベント報道——娯楽性の重視

前章で見たように、『大朝』『大毎』両紙が東京紙以上に野球（スポーツ）イベントを積極的に開催していった背景には、関西地域におけるマス・レジャー志向の高まりという現象が存在していたのだが、本章ではそうした時代状況にあって両紙が自社の野球イベントをどのように報道していったのかについて考察したい。

両紙が本格的に野球イベントの主催に乗り出すきっかけとなったのは、日米両国の大学チームを招待して開催した国際試合であった。まず1910（明治43）年10月に『大毎』がシカゴ大と早大を招いて阪神電鉄の香櫨園グラウンドで

「日米野球大試合」を開催、その3年後の1913(大正2)年10月には『大朝』がワシントン大・早大・明治大を招いて阪急電鉄の豊中グラウンドで「日米大野球」を開催したのである。

両紙は賑やかな演出を行うことによってイベントの盛り上げを図った。たとえば『大毎』は、選手たちを出迎えるセレモニーとして在阪学生有志500名と『大毎』社員による「提灯行列隊」なるものを組織し、このイベントに合わせて作られた「日米野球選手歓迎提灯行列の歌」¹⁸⁾を高唱しながら、大阪駅から選手たちの宿泊先の大阪ホテルまで賑やかな提灯行列を行った。そして試合本番では、団体観覧を申し込んだ地元の学生たちによる「模範的応援隊」を事前に組織し、早大のスクールカラーである赤色の旗を持たせて当時日本に輸入されたばかりのカレッジ・エールを贈らせている。

こうした盛り上げの甲斐あってこれら2つのイベントは盛況を博したのであるが、重要だと思われるのは、両紙ともに娯楽性を非常に重視した紙面作りを行っているということである。両紙の報道記事には、イベントの雰囲気面白おかしく伝えようとする表現があちらこちらにちりばめられている。

「早軍は市軍が歩調を一にし態度を改めて面目を発現し来るに会してソロソロオチケ出し回を重ねるに及んで倍々旗色が悪く過失ばかり続出し常方は依然二点たるに反し先方はどんどん殖彘て行くのでサア見物は気を揉み出し、声を囁らしてフレーとかしつかりとかいゝよゝゝよとかやるがさらに効果が無いので、中にはクリヤリー君のバントで走る時『ライスカレー君うまいぞ』とやつて満場をどよませ、オーロバート君が飛球でひどく太

腿に投げ付けられビツコを引き引き馳けて行くと『米国健児!! 同情致します』と怒鳴る者があつて大笑ひ」(傍点原文)〔『大毎』, 1910年10月28日付〕

「爺さんと婆さん 天氣の宜いのに浮かれ出した六十恰好の老爺^{ぢいさん}、さつぱりした木綿物の尻端折りに腰には手馴れた瓢箪をぶら下げ、連れ立つた婆さん白木綿の小さい風呂敷を提げて頻りに見物場所を探して居る、老人の事とて人混みを押し分ける事も出来ず何時の間にか後の方へはみ出された仕様事なしにスタンドの下へ押し込められた、いくら覗いても向の見える場所ではなし、足ばつかりやと老爺暫くばやいて居たが婆さん傍から、どないせ分りやしまへんが、此处から見たらと執成し顔、いんやせめて勝負位は分るやると頑張つた老爺暫くすると風呂敷を擴げて跼坐をかき、瓢箪を傾けてちびちび飲りつつ婆さん一つ如何や」(傍点原文)〔『大朝』, 1913年10月6日付〕

こうした紙面作りは、1915年9月に『大朝』によって創設された「全国中等学校優勝野球大会」でも、やはり踏襲されているのである。

「三十七八の親爺手に酒問屋と大書したる洪団扇を持ち豪然とグラウンドを睥睨する様物凄く番頭風の若者を捉へ『ホラお面を冠つてお胴を当てゝゐる男があるでげせう、あれが布団(本塁の事)の番人でさ、あそこへ真中に立つてゐる男が球を投げると、棒を持つてゐる男が打つのでさ悪い球を四つ出すと口八で行けるんでさ、マー無銭遊興のやうなものでげす』その瞬間一塁より二塁へ盗塁をし

て見事に成功した『あいつが！あいつが盗塁
つて云ふ奴でさ、謂はゞ空巢狙のやうなもん
でね……』教はつてゐる男さも感心した、渋
団扇の男大得意で『解らない所があるならド
ンドンお訊きなせい』（第2回大会、慶應普
通部 - 香川商業戦）（『大朝』、1916年8月19
日付）

このように、両紙の野球イベント報道には読
者を楽しませようとする雰囲気極めて濃厚な
のだが、こうしたやり方はマス・レジャー志向
が高まりつつあった当時の関西地域にあって、
レジャーを楽しむ欲求を持った多くの民衆の関
心を引きつけ、多数の来場者を招いて盛大なイ
ベントとして成立させなければならなかったこ
とに加えて、まだ一般民衆にほとんど知られて
いなかった野球を、誰にでも親しみやすいよう
に紹介する必要があったことから来ているであ
ろう。それは以下のような主催者の証言によっ
ても明らかである。

「一般にまだ何程も理解されてゐない野球
を、この機会に成るべく広く知らせようとい
ふので一度も野球を見た事のない人が読んで
も興味を持ち得るやうに、またそれが機縁と
なつて野球に親しむ人も出て来るやうにと、
貴重な紙面を割いて、いはゆる素人向きの記
事をも載せたのであつた」（朝日新聞社編
（1929）、11頁）

さて、このような報道にふれた一般民衆の多
くは野球を娯楽性が失われた精神主義的なもの
としてではなく、むしろ逆に娯楽色を極めて強
く持ったものとして受容していった可能性がよ
り高いのではないだろうか。即ち、それまで学

生など一部の階層によって享受されているに過
ぎずエリート文化的な色彩が強かった野球とい
うスポーツが、『大朝』『大毎』両紙の積極的な
関与によって、とりわけ関西地域においては誰
もが近づきやすい大衆的な文化へと変えられて
いったという歴史像が強く浮かび上がってくる
のである¹⁹⁾。

おわりに

本研究における一連の考察によって示唆し得
ることは、日本における野球の受容と大衆化の
過程においては一高や早大・慶大といったエリ
ート学生たちの思想や実践よりも新聞社等のマ
ス・メディアによる影響の方が大きく、それら
による娯楽的な演出が極めて重要な役割を果た
していたのではないかということである。その
影響を過大に見積もることは慎まねばならない
ものの、少なくとも先行研究において十分に検
討されているとは言えないマス・メディアの役
割や地域差といった要素について十分に踏ま
え、そのうえで一般民衆の視座から日本におけ
る従来の野球受容史像を捉え直す視点の重要性
について問題提起しえたのではないか。

しかし、今回提示しえたのは新聞社による野
球（スポーツ）イベント開催の具体的動向のみ
で、このようなイベントの影響を受けたであろ
う選手たちや民衆が、そのことによって野球を
どのように解釈し、経験していったかというこ
とについては明らかにすることができなかった。今後は甲子園大会についての考察を含め、
とりわけ関西地域の民衆にとって野球が持った
意味を一つ一つ掘り起こしていく作業が中心的
な課題になるとと思われる。

注

- 1) 当時の新聞社とスポーツとの関係について検討した先行研究としては、有山(1997)、尹(1997)、水谷他(1993)、清水(1998)、高嶋他(1990)、綿貫(2001, 2004)などを参照。
- 2) こうしたエリート学生たちの野球実践や思想について検討した研究としては菊(1993)、日下(1985)、坂上(1986)、高橋(2002)などを参照。
- 3) 『大朝』は1879(明治12)年1月25日、『大毎』は1888年11月20日にそれぞれ大阪で創刊された。そして『大朝』は1888年6月、旧自由党幹部だった星亨経営の『めさまし新聞』を買収、同年7月10日からその号数および従業員を引き継ぐ形で『東京朝日新聞』を創刊し、東京に進出した。また『大毎』も1911年2月、経営が傾きかけていた『東京日日新聞』の発行権を、題号を継承する形で三菱から譲り受け、同年3月1日から新発足させた。その後太平洋戦争期に至るまで、両紙ともに発行部数も経営規模も大阪の方が大きく、かつ報道・言論とも両都市において別々に行われていた。したがって、『大朝』『東朝』および『大毎』『東日』は、それぞれいわば親会社と子会社と言える関係にあったのだが、実態はお互いに独立した別々の新聞だったのである。このことは、本研究においてこれらの新聞社の野球(スポーツ)に対する関与のあり方の違いを考えていくうえで、まず踏まえておくべき重要な点であると言えよう。なお、昭和の戦時体制下における新聞社の整理統合の影響を受ける形で、『大朝』と『東朝』が1940(昭和15)年9月1日から名称を『朝日新聞』に統一、そして『大毎』と『東日』も1943年1月1日から『毎日新聞』に統一され、現在に至っている〔岡(1987)〕。
- 4) 有山(1995a)、13-40頁、および有山(1997)、49-51頁などを参照。
- 5) 以下、この表1, 2に加えて後述の表3~7までの作成に関して、参照した資料は以下の通り。
 - ・津金澤聰廣編(1996)『近代日本のメディア・イベント』、同文館、巻末の「新聞社事業史年表」。
 - ・岸野雄三他編(1986)『近代体育スポーツ年表

三訂版』大修館書店。

- ・大阪朝日新聞社編『野球年鑑』(大正5~7年度)大阪朝日新聞社
 - ・同『運動年鑑』(大正8~15年度)大阪朝日新聞社/日本図書センター
 - ・朝日新聞百年史編修委員会編(1995)『朝日新聞社史 資料編』朝日新聞社。
 - ・毎日新聞社編(1972)『毎日新聞百年史』毎日新聞社。
 - ・相馬基編(1941)『東日七十年史』毎日新聞社。
 - ・報知新聞社編(1941)『報知七十年』報知新聞社。
 - ・読売新聞100年史編集委員会編(1976)『読売新聞百年史 別冊 資料・年表』読売新聞社。
- 6) ここで断っておかなければならないのは、典拠の諸資料のうち、一次資料と言えるのは『野球年鑑』および『運動年鑑』のみで、特に地方支局・通信部レベルで行われたイベントの確認はこれらに拠るところが大きいのだが、『大朝』による編集・発行であることから推察されるように、次節でふれる東京各紙の調査も含めて、掲載されているイベントが自社(『東朝』も含む)のものに偏り、他紙のものについては十分にカバーしきれていない可能性を否定できないことである(事実、『大朝』関連のイベント数が最も多くなっている)。また、これらの発行が1910年代後半以降であることから、それ以前の時期に行われたイベントで、特に中小規模のものが抜け落ちている可能性もあると思われる。しかしそうしたことを差し引いても、この時期に『大朝』『大毎』両紙が自らの足場である関西地域だけでなく、西日本各地でありとあらゆるスポーツをイベント化し、その発展に深く関与していったことは動かしがたい事実だといってい
 - 7) 『東朝』が「野球害毒キャンペーン」を展開しているのと同時期、本社である『大朝』は連載記事を一切掲載しなかったのみならず、「野球號」を掲載して野球そのものを奨励し、支援していくという論陣を張った。このことの詳細に関しては、秦・加賀(1991)を参照。

- 8) 『東日』が共催者として加わるのは、管見では1933（昭和8）年の第10回大会からである。
- 9) 菊（1993），220頁を参照。
- 10) 以上の施設の開設については，以下を参照。
・京成電鉄社史編纂委員会編（1967）『京成電鉄五十五年史』京成電鉄。
・後藤正策編（1941）『京王電氣軌道株式會社三十年史』京王電氣軌道株式會社〔野田正穂・原田勝正・青木栄一・和久田康雄編（1983）『大正期鉄道史資料 第2集 国有・民営鉄道史 第10巻 王子電氣軌道株式會社二十五年史他』日本經濟評論社に所収〕。
・小田急電鉄株式會社社史編集事務局編（1980）『小田急五十年史』小田急電鉄。
・岸野他編，前掲『近代体育スポーツ年表』。
- 11) 表3～7については，先に指摘したように資料的な偏りの存在を否定できず，東京各紙のイベントについても中小規模のものに関しては抜け落ちているものがあるかも知れない。しかし，『大朝』『大毎』に負けないほどに大規模なスポーツイベントを数多く開催していた新聞社が，この時期までの東京に存在していなかったことは間違いないと言える。
- 12) 佐々木（1999），117頁および山本（1981），404-407頁を参照。
- 13) 山本（1981），279-280頁を参照。
- 14) 両紙の関心が及ぶ範囲はただ野球（スポーツ）のみにとどまるものではなく，海外旅行・美術展・慈善事業等，多種多様な分野に触手を伸ばして盛んな事業活動を展開していった。当時の新聞界にあって多種多様かつ大規模な事業を次々と実施したのは，資金力豊富な『大朝』『大毎』両紙を除けばほとんどないといってよい状況であった。それら個々の事業展開に関しては，津金澤編（1996）を参照。
- 15) 戦前期の電鉄会社による野球場整備の全国的な傾向については坂井（2004）を参照。坂井自身がそうした認識を示しているわけではないが，坂井が提示している野球場リストを見ても，全国的に関西私鉄が野球場整備の先駆的存在となっていたことがはっきりと窺える。
- 16) 竹村（1996），122頁を参照。

- 17) 橋爪（1996）によれば，明治期に日本国内で開かれた博覧会の中で，規模・内容ともに最も充実した事例であったこの博覧会は，単なる勸業目的のイベントではなく，「遊び」の要素がとみに重視されたことで知られている。「博覧会場の娯楽化」という路線は既にそれ以前から進捗しつつあったが，この博覧会でもそれは踏襲され，会場内には展示館の他に，日本初のメリーゴーラウンドやウォーターシュート，大阪初のエレベーターを装置した大林高塔など，娯楽性の強い遊戯機械，そして不思議館や世界一周館などのファンハウスがいくつも設けられた。
- 18) 以下のような歌詞が紙面に掲載されている。
「（一）四十三年秋の 氣も澄む月今宵
來たれり大阪に 日米野球團
（二）米の精鋭，市俄古 日本に，早稻田あり
天下の野球戦 乾坤一擲香櫛園
（三）長棍一度，打てば ボール雲に入り
血は湧き肉躍る 野球は，男子の技
（四）威風堂々，勇士は 來たれり，いざ迎へ
振へ，市俄古軍 立てよ，早稻田勢」
（『大毎』，1910年10月24日付）
- 19) 以上の議論においては，当時の野球（スポーツ）と新聞社等の様々な企業との結びつきに関してやや肯定的に描きすぎているかも知れない。たとえば竹村（1996）が指摘するように，野球と諸企業とが結びつくことによって，野球の大衆化が進む一方で金銭的価値との強い結びつきもまた促進され，たとえば中等学校野球部と地元の市町村・後援会との金銭的な面での癒着などといった，「商業化」をめぐる様々な問題を生ぜしめたとも考えられるからである。そのような角度からの批判的検討もまた必要となるだろう。

参考文献

- 有山輝雄（1995a）『近代日本ジャーナリズムの構造——大阪朝日新聞白虹事件前後』東京出版。
- 有山輝雄（1995b）「新聞の略史（2）——日本」稲葉三千男・新井直之・桂敬一編『新聞学〔第3版〕』日本評論社，36-47頁。
- 有山輝雄（1997）『甲子園野球と日本人——メディア

- がつくったイベント(歴史文化ライブラリー14)』吉川弘文館。
- 朝日新聞社編(1929)『全國中等學校野球大會史』朝日新聞社。
- 原武史(1998)『「民都」大阪対「帝都」東京——思想としての関西私鉄』講談社。
- 橋爪紳也(1996)『大阪モダン——通天閣と新世界』N T T出版。
- 秦真人・加賀秀雄(1991)「1911年における野球論争の実証的研究()——『東京朝日新聞』及び『大阪朝日新聞』の編集内容の相違をめぐって」『総合保健体育科学(名古屋大学総合保健体育科学センター紀要)』第14巻第1号, 33-38頁。
- 尹良富(1997)「巨人軍の創設とプロ野球に関する一考察——読売新聞と東京朝日新聞との比較」『一橋論叢』第117巻第2号, 277-294頁。
- 菊幸一(1993)『「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学——日本プロ野球の成立を中心に』不味堂出版。
- 高津勝(1994)『日本近代スポーツ史の底流』創文企画。
- 高津勝(1995)「欧米近代スポーツと民衆——日本における土着文化と外来文化」中村敏雄編『スポーツの伝播と普及(スポーツ文化論シリーズ)』創文企画, 95-138頁。
- 高津勝(2001)「野球が村にやって来た——異文化, 和魂洋才, そして土俗」『現代スポーツ評論』第4号, 創文企画, 56-70頁。
- 日下裕弘(1985)「明治期における『武士』的, 『武士道』的野球信条に関する文化社会学的研究」『体育・スポーツ社会学研究』第4号, 道和書院, 23-44頁。
- 水谷秀樹・大川信行・西川友之(1993)「大正期における駅伝競走の普及・発達と新聞ジャーナリズム——報知新聞社主催・『四大校駅伝競走』(1920)を中心にして」『富山大学教育学部紀要A(文科系)』第44号, 47-56頁。
- 岡満男(1987)『大阪のジャーナリズム』大阪書籍。
- 小野瀬剛志(2001)「昭和初期のスポーツ論争——『日本的スポーツ観』批判をめぐって」『スポーツ社会学研究』第9号, 60-70頁。
- 坂井康広(2004)「戦前期における電鉄会社系野球場と野球界の変容」『スポーツ社会学研究』第12号, 71-80頁。
- 坂上康博(1986)「日本近代におけるスポーツの受容と展開——明治期の校友会野球部を中心に」伊藤高弘他編『スポーツの自由と現代』下巻, 青木書店, 401-434頁。
- 坂上康博(2001)『にっぽん野球の系譜学(青弓社ライブラリー15)』青弓社。
- 佐々木隆(1999)『日本の近代 14 メディアと権力』中央公論新社。
- 佐山和夫(1998)『ベースボールと日本野球——打ち勝つ思考, 守り抜く精神』中央公論社。
- 清水諭(1998)『甲子園野球のアルケオロジ——スポーツの「物語」・メディア・身体文化』新評論。
- 高橋豪仁(2002)「飛田穂州の野球信念と物語の生成」『奈良教育大学紀要』第51巻第1号, 99-108頁。
- 高嶋實・水谷秀樹(1990)「東海道駅伝徒歩競走の成立事情——大正期におけるスポーツの普及・発達と新聞ジャーナリズム」『日本体育大学紀要』第20巻第1号, 1-18頁。
- 竹村民郎(1996)『笑楽の系譜——都市と余暇文化』同文館。
- 津金澤聰廣編(1996)『近代日本のメディア・イベント』同文館。
- 吉見俊哉(1996)「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』所収, 同文館, 3-30頁。
- 綿貫慶徳(2001)「近代日本における職業野球誕生に関する史的考察——新聞社主催による野球イベントの分析を中心として」『スポーツ史研究』第14号, 39-53頁。
- 綿貫慶徳(2004)「明治後期から大正期における大阪毎日新聞社の浜寺海水浴場経営に関する史的考察——新聞販売ターゲットとしての新中間層に着目して」『体育史研究』第21号, 1-14頁。
- 山本武利(1981)『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局。

The Process of Development of Baseball (Sports) Events Held by
Newspapers Based in Tokyo and Osaka
—From 1910 through 1925—

NISHIHARA Shigeki*

Abstract: This paper sets out to review the process of development of baseball (sports) events held by newspapers based in Tokyo and Osaka from 1910 through 1925, and thereby to question generally-held opinions about the acceptance and popularization of baseball in Japan. From the end of the Meiji era to the Taisho era, when newspaper management policy changed considerably, *The Osaka Asahi Shinbun* and *The Osaka Mainichi Shinbun*, both of which were based in Osaka and made a great economic leap, promoted baseball (sports) events more enthusiastically than those based in Tokyo, closely linked with the private railway companies in the Kansai area which were making a remarkable development known as the “Private Railways Kingdom.” It seems that these movements made by both newspapers were greatly influenced by the rising popular inclination toward mass leisure in the Kansai area, which seems to have been heightened following the 5th National Industrial Exhibition (1903). Both the newspapers tried to report on a series of events for pleasure in order to popularize baseball, which was previously almost unknown to the public. This seems to suggest that baseball in Japan was gradually accepted and took root among the public as a highly pleasurable mass culture, which is contradictory to the generally accepted opinion that in the process of its widespread acceptance in Japan, baseball was robbed of its pleasurable nature and forced to change into something spiritual and oriented toward only winning a victory.

Keywords: baseball (sports) events, the differences between Tokyo and Osaka, the tie-up between the newspapers and private railway companies based in Osaka, pleasurable nature, the acceptance and popularization of baseball.

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University